

ISSN 0913-1213  
Himi Shunju

歴史・民俗・文化

# 氷見春秋

第32号

平成七年十一月十日  
発行  
平成七年十一月六日  
印刷

氷見春秋会発行

# 氷見地方周辺の地藏半跏石仏

尾田 武雄

## はじめに

能登をはじめ氷見地方は、石造物の宝庫である。石造物を研究するものにとって、非常に魅力的なところである。石動山などの信仰の山があるからなのであろう。また古くから開けたところなのでもある。

砺波地方の古い神社に、たまたま見かけるあきらかに近世の石仏でない地藏半跏像がある。これは、「白山と地藏半跏像石仏の広がり―特に砺波地方を中心に―」（『土蔵』七号）で発表したのが、その中で十二体の地藏半跏像石仏を報告した。これらの石仏の制作年は、鎌倉時代から室町時代と推定できるものである。その石材が氷見地方のものではないか、また砺波地方へ石動山を經由して、白山信仰などが入ったのではないかと推論から、氷見地方にこのような、地藏半跏像石仏が多いのではないかと思っていた。

そこで富山県文化財保護指導委員田中清一さんの協力を得て、氷見地方の地藏半跏像を

探訪調査してみた。その報告としてこの小論を発表したい。

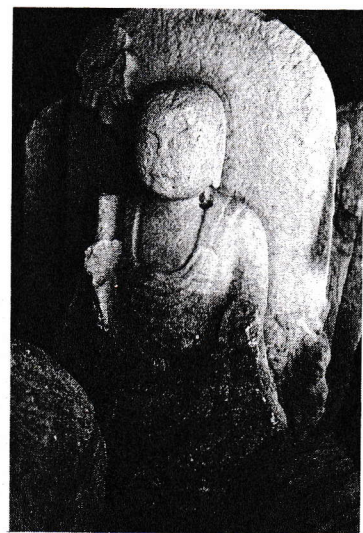
## 1 延暦寺地藏

氷見市堀田は、神代川上流に位置している。ここに曹洞宗大養山延暦寺があり、その前の地藏堂の中にこの地藏がある。錫杖が中央で折れてはいるが舟形光背で保存状態はよい。

延暦寺は、慶長一七年の開基とされているが、『氷見市史』（四四二頁）によると、もと天台宗であって、改宗されたとしている。そして観音堂には十一面観音が安置されている。また、近くには相当古くからあって、地方としては大社であったと思われる岩武雄神社がある。（『氷見市史』）

この堀田には正徳二年社号帳による、三拾八社権現、白山、神明、神明、八王子、八幡、諏訪、稲荷、火ノ宮、住吉、神明、白山がある。この堀田では、白山二社と延暦寺の十一面観音に注意される。またこの地方から硬質

砂岩が切り出され、堀田石として各地へ移出された。



延暦寺地藏

## 2 土倉地藏

土倉は、上庄川の最上流に位置し、石川県羽咋郡押水町に接するところにある。この地区の地藏坂というところに、この地藏がある。

『久目村史』（平成二年発行）によると「明治の初めころ土倉の島崎家が家を建てようと宅地を造成していたところ、石造物がいろいろ土中から出土した。地藏数体をはじめ五輪塔など多数があった。土地の人たちはもったいないと高台の道路上の一角にこれを安置し「ぞん坂の地藏様」としていまも崇敬している」とある。

この地藏は舟形光背で、ちようど首のところで切れている。そして左の顎のところから欠落している。五輪塔も一緒に出土したと伝えているが、土倉の近くの坪池には市指定文化財の宝篋印塔がある。

近世では、土倉は赤羽毛と一村であった。

正徳二年社号帳には、土倉の記載は無く、赤羽毛には少名彦、八幡がある。現在、土倉には八幡宮がある。また元真言宗で、明応四年開基の真宗大谷派北谷山養安寺がある。



土倉地蔵

### 3 諏訪社地蔵

久目村は、明治二十二年に池田、触坂、桑ノ院、見内、岩瀬、棚懸、坪池、赤羽毛、老谷の九カ村が合併したものである。この諏訪社地蔵は、池田の諏訪社にあったものである。この神社は『久目村史』によると、「従来境内にある古木をもって神体と崇め、社殿の建設はしない」とある。

事実、この神社には社殿はない。鳥居の正面には巨樹があり、その周辺には宝篋印塔、五輪塔、板碑、如来石仏等の中世石造物が集められている。この中に混じってこの地蔵がある。舟形光背で縦半分が欠落している。

元この地区にあったといわれる観音寺に、この石造物があったとされている。ところで、正徳二年社号帳によると、池田には八幡宮、

白山、神明大神宮、白山、諏訪大明神がある。この地蔵が、この諏訪社に元々なかったものであるから、観音寺は白山と関わりがあったものかもしれない。



諏訪社地蔵

### 4 下久津呂地蔵

（『富山県石動山信仰遺跡遺物調査報告書』（昭和五十九年発行）の「角間道上り口の石仏」の項（七二頁）に紹介されている地蔵である。



下久津呂地蔵

オベリスク状石塔の合体であり、顔面と宝珠が削り取られている。下久津呂の八幡社にあるものである。

正徳二年社号帳によると、八幡、諏訪大明神、滝権現とある。また『富山縣神社誌』（昭和五十八年発行）による祭神は「応神天皇、神功皇后、比売大神、伊弉諾命、伊弉冉命、菊理姫命、罔象女命、建御名方神である。菊理姫命は白山の祭神であり、正徳二年社号帳における滝権現は、推察ではあるが白山と関わりがあるのではないかと思われる。

### 5 栗原地蔵

久津呂川上流に位置する。往古十二町潟がこの栗原まで入り込んでおり、越中守の相伴家持が馬をつないだという「駒つなぎ桜」（県指定天然記念物）がある。



栗原地蔵

この地蔵は、円光背の堂々たる彫法で造りも大きく、石材は安山岩のようである。錫杖と宝珠は削り取られ、右顎も傷を負っている。また台座になっている石は、宝篋印塔の基礎部である。

正徳二年社号帳によると、栗原には白山大権現、住吉大明神、貴布禰大明神、天神、火宮があった。昭和三年に、この各社は現在の諏訪社に合祀された。この地蔵は白山大権現に関わるものかも知れない。

## 6 上田神社地蔵



上田神社地蔵

上田については『角川日本地名大辞典富山県』に「上庄川の支流上田川の谷にあり、三方を丘陵山地に囲まれ、中央に帯状小平地がある。東方、中尾との境に竹里山があり、山上に千久里城跡がある。西北方の滝尾山（早借地内）に、往古密教寺院四十九坊が栄えていたと伝え、参詣路は三方からつけられ、上田口には大門の地名が残り、大門姓の家がある。」と記述されている。

上田には、真宗大谷派の富仲山勝福寺と竹峰山長林寺があるが、共に往古密教寺院の坊

の一つであったと伝えられている。

正徳二年社号帳によると、愛宕、熊野、諏訪大明神、神明大神宮、住吉大明神、山王大明神、天神宮があった。これらは明治期に上田神社に合祀された。

上田神社の境内の巨樹のかたわらに、中世石造物などが寄せ集められているが、その中に混じってこの地蔵がある。首が明らかに削り取られ、錫杖と宝珠が無い。この地蔵は伝承によると、早借の滝尾山中の道端から出土したという。

## 7 上田諏訪社地蔵



上田諏訪社地蔵

俗に上の谷内というところにある。鳥居の向こうで、数本の巨樹がある奥まったところに、この地蔵が鎮座している。地蔵の周辺には、五輪塔などの残欠が寄せ集められている。

地蔵そのものは、堂々たる風格である。だが右頭部と光背が欠落していて宝珠も無い。雨乞の神として今も信仰されている。

## 8 日名田地蔵1

日名田地区は上庄川の支流三尾川の谷にある。古くから氷見から能登の志雄へと行く街道筋であった。この地蔵は、その街道ふちにあったといわれる。

寺院は元真言宗であったという日南山長福寺があり、江戸初期まで、臨済宗国泰寺派宝光寺もこの地にあった。

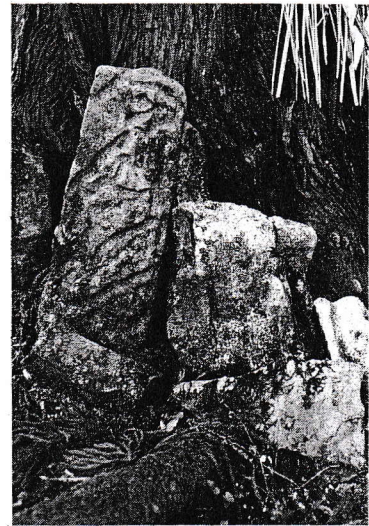
正徳二年社号帳によると、白山が一社あるが、現在は少彦名社がある。この地蔵は社殿の無い諏訪社の巨樹の根本にある。そして、左頭部が削り取られている。



日名田地蔵1

## 9 日名田地蔵2

この地蔵も日名田地蔵1と同じところであり、一応日名田地蔵2とした。首から上部が無く、錫杖、宝珠も欠落しており、その原形は薄い。



日名田地蔵 2

10 西念寺地藏



西念寺地藏

町部の南大町の西念寺墓地に、この地藏がある。もともとこの地にあつたものなのか、また持ち込まれたものなのかはわからない。南大町には、旧氷見町の南十町の総社日枝神社がある。西念寺はこの地方では珍しい浄土宗の寺院である。「貞享二年寺社由緒書上」によると、つぎのようにある。

西念寺（浄）

一 当寺幸徳山子見堂西念寺、最前時宗ニ而歡喜踊躍之念仏勤行之処ニ、築紫之住人不慮ニ独之愛子を失、行方不知、仍之住国立出諸国相尋、当国当所江尋来、彼踊躍念仏執行諸人參詣之中ニ父子相見仕候。其父悦而一堂造立仕候故、堂之名を則子見堂与申候。是等之徳を以、山号を幸徳山与申候。然後醍醐天皇之太子信濃宮浄蓮社光然良明上人和尙、延文五年ニ始而浄土宗門ニ被成、開闢候。開闢ニ至当歳三百式拾六年ニ罷成申候。居屋敷地子地ニ居住仕申候。一 当寺靈宝・記録等御座候処ニ、中比守山之神保氏張与飯山之中沢筑前守合戦之剋、飯山も当寺へ取出、守山も当寺へ押寄申事及数度、度々令放火候節、靈宝・記録等焼失仕旨申伝候。相残干今御座候ハ、聖徳太子之御作阿弥陀之木像耄躰御座候。一 高德院様・瑞竜院様・陽広院様被為掛御腰候寺ニ而御座候。

越中射水郡氷見町浄土宗 西念寺

託誉

貞享貳丑年九月廿七日

これによると、「最前時宗ニ而歡喜踊躍之念仏勤行之処」に注目され、また浄土宗の宗門寺院書上である『蓮門精舎旧詞』（富山県史通史編Ⅱ中世）二五〇頁）にも「当寺最前

者時宗也」とある。

時宗の人々が、この西念寺を中心に遊行されていたことが理解できる。しかしその時宗の人々と、この地藏の関わりはわからない。だが同時代の造立である。

11 上日寺地藏



上日寺地藏

上日寺は市の中央部の朝日山公園の東麓にあり、真言宗の寺院である。この寺院については、『氷見市史』（六〇八頁）に「中世における状況は、よくわからない」としているが寺伝には、「正平年間、仁然僧中興す、当時七堂伽藍の構造にして、壮麗広大なりしかど、後漸く衰えたり」という。

元龜三年（一五七二）八月、長沢筑前源光国が、西国三十三カ所観音石仏を寄進したが、現在境内に残っている。

この地藏は、多くの中世石造物と一緒に、上日寺境内より出土たとされている。この地藏に関しては、多くはわからない。しかし顔面が奇麗に残っている。ただ残念なのは、

左腕が取れていることである。

### 12 千手寺地蔵

朝日山の山頂にあり、上日寺と同じく真言宗の古刹である。『永見市史』(六一〇頁)によると「寺伝によれば、天正年間佐々成政の兵火にかかり、宝物記録等、ことごとく焼失したとのことである。今の山上に移ったのは元禄二年(一六九〇)である。」という。

この地蔵は、千手寺境内の前に並ぶ観音石仏の中に混じってある。どこからか持ち込まれたものなのであろう。

上日寺と千手寺のある朝日には、正徳二年社号帳によると観音堂、薬師、弁財天、山王、神明、祇園、神明、観音堂、天神があった。



千手寺地蔵

### 13 加納地蔵

上庄川下流の北に位置していて、谷内山の山麓に八剣社が鎮座する。ここには、宝篋印塔、多層塔、五輪塔、板碑等の中世石造物残欠が散在している。また天文元年に国泰寺二

十三世春溪によって臨済宗に改宗し、江戸初期に当地へ移転した宝光寺がある。

正徳二年社号帳による社名は八幡、観音薬師(但シ一宮之内二社、剣宮、白山、白山、稲荷、諏訪、観音、観音、諏訪である。

この地蔵は堂々たる風格をもち、ほとんど傷がない。ただ宝珠が欠落しているだけで、顔面も奇麗に残っている。この地蔵のまつりに関わる地元の宝光寺の門前には、貞享二年の銘がある笏谷石で作られた浮き彫り地蔵立像がある。この地蔵の宝珠も欠落している。



加納地蔵

### 14 上稲積地蔵1

稲積は余川川の下流に位置する。上稲積と下稲積に分かれていて、この地蔵は上稲積のバス停付近の小堂の中にある。

南北朝期の観応三年の「軍忠状」に、稲積の地名が出てくる。桃井軍が守っていたとされる木谷城跡があり、中世において重要な位置にあったところであった。

正徳二年社号帳によると、菅丞相天神、白山、白山、神明の社名がある。ところでこの

地蔵は、首、宝珠、錫杖の上部が欠落しているが、その彫法は威風堂々としている。石材も上品な白いシルト岩質泥岩である。



上稲積地蔵1

### 15 上稲積地蔵2

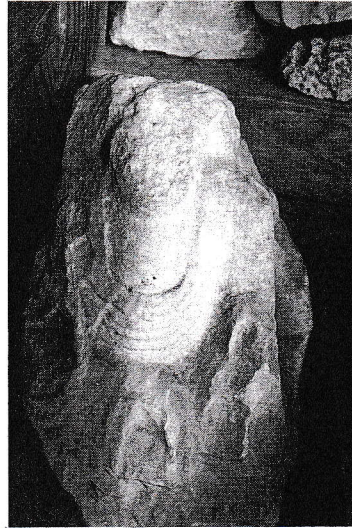


上稲積地蔵2

上稲積地蔵1と同じところにある。上稲積地蔵1よりはやや小振りであるが、宝珠、錫杖は残っている。しかし顔面はすこし削られ、左の光背と地蔵の頭部が欠落している。

この堂内には、近世末の造作と思われる地蔵が三体と中世石仏の阿弥陀仏が一体ある。

16 余川高柳地蔵



余川高柳地蔵

余川は、余川川の中流に位置するところにある。南北朝期の文和二年の「軍忠状」には、「横河保」として見える。

正徳二年社号帳によると、上余川に住吉、若王子、八幡宮、八幡宮、八幡宮、八幡宮、火宮があり、下余川には金田大明神、五社大明神がある。この地蔵は、県道鹿西氷見線の間に入って、

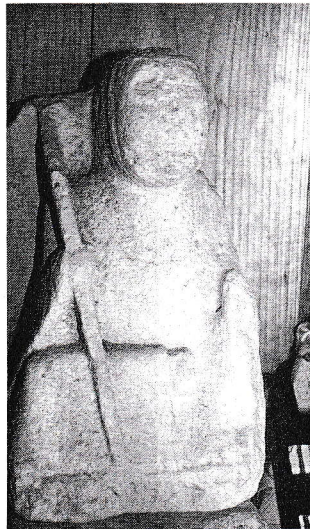
この小堂には、地蔵六体と中世石造物の阿弥陀石仏、五輪塔の残欠などがある。これらは、この地域を開拓した際に土中より出土したものである。中央には、地蔵立像があるが、この余川高柳地蔵は小堂の中の隅の方にある。この地蔵は、顔面、宝珠、錫杖、右足などが削り取られほとんど原形は無い。

17 余川古戸地蔵

余川古戸には、臨済宗国泰寺派の興聖寺が

あるが、その西に小堂がある。その中にこの地蔵がある。

この地蔵は、余川川の川の中より出土した。造りそのものはやや時代が下るようで、衣文や足の組み方などに省略が認められる。顔面が削り取られていて錫杖の頭部は無く、宝珠もまた無い。



余川古戸地蔵

18 興聖寺地蔵

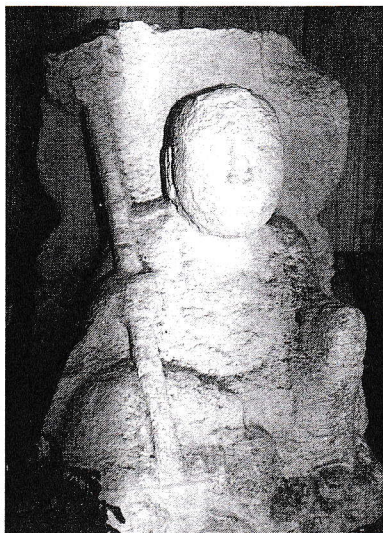


興聖寺地蔵

興聖寺墓地にある。威風堂々としているが顔面が削られ、光背右上部が無い。安山岩質の石材で、長く露座のためか風化が甚しい。

この興聖寺には、鎌倉時代の作風である聖観音がある。寺伝では、長沢筑前の守護仏であったとされている。

19 余川杉谷地蔵1



余川杉谷地蔵1

石動山へと行く街道沿いにある。小堂は、中にある扁額によると、明治二十五年に再建された。伝承によれば南北朝に桃井直常が、能登の守護吉見氏を攻めたが、かえって敗北した。そのとき、亡くなった南朝の武士を弔ったのがこの地蔵であるという。

円光背で、やや保存状態は良い。今は安産の地蔵として信仰されている。

20 余川杉谷地蔵2

余川杉谷地蔵1と同じところにある。小堂の中の左端にある。高さ三十センチとやや小振りである。錫杖、宝珠が欠落しているが、衣文などがはっきりわかり、保存状態はすこぶる良い。



余川杉谷地蔵 2

### 21 味川地蔵

味川は、余川の支流一芻川の谷に位置する。この地蔵は、阿努神社近くの旧道ぶちにあり、露座である。円光背で完成品に近く、顎がやや削られている。また大きさは高さ五十七センチと大振りである。



味川地蔵

### 22 胡桃地蔵

石川県鹿島町に接する胡桃は、地滑り地帯として有名である。明治二十四年の大火や、

昭和三十九年の大地滑りで大打撃を受け、過疎化が進んでいる。

ここには、現在火神社がある。この神社の向かって右側に小堂があり、この中にこの地蔵が鎮座している。この地蔵の左側には、中世石造物の阿弥陀石仏があり、小堂の縁の下には宝篋印塔の残欠が残っている。この地蔵は、もと山の奥にあったものであるという。正徳二年社号帳によると、胡桃ヶ原村として火宮がある。

さてこの地蔵は、稲積1、2の地蔵と同じく非常に白い石材で造られている。そして地蔵の首は抉り取られ、その上に取られた首が載せてある。宝珠、錫杖も削られている。しかしながら、高さ五十五センチと大振りであり、しかも堂々としている。



胡桃地蔵

### 23 村木地蔵

『富山県石動山信仰遺跡遺物調査報告書』

(昭和五十九年発行)の「石造物と関係遺跡」(四六頁)に角間道上り口の石仏として紹介されている地蔵である。

そしてその説明としてつぎのようである。「地蔵堂の本尊。小さいとはいえず、木造瓦葺の小堂も立派であるが、類例は県内どこにもある。ところが、中の本尊である石地蔵は、めったに路傍で見かけられないものである。

微粒、緻密な砂岩を用材とし、浮彫形式とはいえ光背つき丸彫といってよい。光背頂部を欠いての現総高五十四センチ、台座部の最大左右四十七センチ、同奥行四十七センチをそれぞれ測る。鎌倉時代の写実が生んだ一大傑作である。光背は頭光と身光の二重で、光脚部に蓮華を配するらしい。錫杖頭部の名人芸的表現に比して、三道や衣文の形式的な表現、その他気になるところもある。狭い室内で取り出すことも動かすこともできず、のぞき込んだというにすぎないので、コメントはこの程度にとどめる」とある。

この地蔵は上記コメントのとおり、宝珠と左側光背上部が欠落しているのみで、保存状態はすこぶる良い。また小堂前には、中世石造物の阿弥陀石仏が数体ある。

村木のある角間は、信仰の山である石動山の登山口の内の一つでもある。南北朝期には、「閻間」と表記したその地名が見える。また修験者が修行した八代仙が近くにあり、この地は、修験者が足繁く往来したところでもあった。正徳二年社号帳によると、火宮がある。

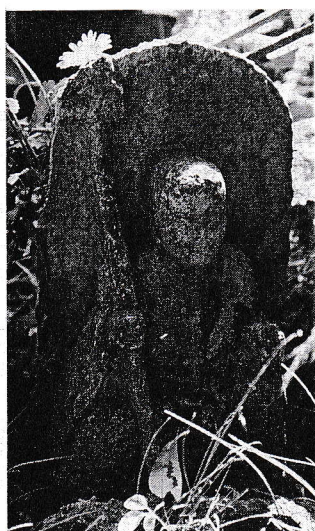


これは石動山の分霊社である。



村木地蔵

24 長坂地蔵



長坂地蔵

これもまた『富山県石動山信仰遺跡遺物調査報告書』（昭和五十九年発行）の「石造物と関係遺跡」（四六頁）に角間道上り口の石仏として紹介されている地蔵である。

長坂別所の集団墓地の中の田口家の墓地にある。この地蔵はもと石動山にあったものと言われている。

この地蔵は、錫杖、宝珠などが奇麗に残り、顔面が少し削られているように感じるが完成品に近い。

長坂は、石動山の影響を大いに受けており、正徳二年社号帳にも、石動山の祭神である五社大明神があり、そのほか、未連大明神、火宮がある。

25 姿地蔵



姿地蔵

姿地区は東に富山湾を臨み、その海上一キロ先には蛇が島がある。この地蔵は白山社にあって、露座である。野の中であり、首、宝珠、錫杖が欠落している。しかし衣文やその彫法はたしかなものが見える。

正徳二年社号帳には、白山宮、九殿大明神がある。

26 平地蔵

石動山への登山道である平沢道の平地区の

高坂剣神社の小堂の中にある。この小堂には、凝灰岩の梵字石が中央に鎮座している。梵字は「キリーク」が刻んであり、その右側にこの地蔵がある。

石材は、稻積1、2や胡桃地蔵と同質のものである。円光背で朽ちかたが激しい、顔面宝珠、錫杖などは無く、衣文なども見えない。風化というよりも、積極的に破壊された感じがする。正徳二年社号帳には、剣大明神が一社ある。



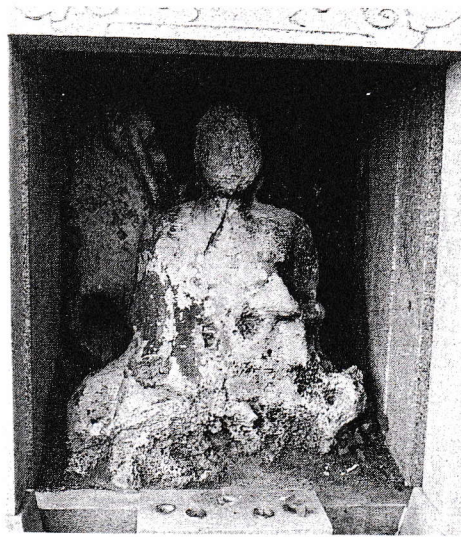
平地蔵

27 唐島地蔵

氷見漁港の沖約三〇〇メートルのところの位置する。『氷見市史』（一七二頁）によるとこの地蔵は「唐島の火ともし地蔵」といわれ「唐島の南がわの地蔵は、海難のとき灯をともして舟を導いてくれるという」とある。

また『氷見の伝説』（昭和五十七年刊）によると「比美町港の海岸の向かいに見える島は昔、唐の国から贈られてきた島だ」とい

とで名高い。氷見漁港から約十町ほど離れた海中にあるこの島の登り口の左側の岸壁に、高さ約四尺余りの石地藏が安置してある。



唐島地藏

伝えるところによると天長二年（八二五）

弘法大師が北国巡歴のみぎり、唐からきた靈験あらたかな島だと聞かされ、漁師の案内で島に登られた。さっそくこの岩かげで三十七日間の参籠修行をされた。めでたく宿願を成就され深い感動を覚えられた。さきに案内してくれた漁師たちの漁の姿をおもい浮かべられたりもした。

毎年毎年、漁をする舟が海に漕ぎ出し、途中、あらしにあって生命を失う者も数知れずいるとの話に心痛めておられた。そこで宿願成就のお礼と水難防止の大願をたてられて、自ら刻まれた地藏であるといわれている。

かつて灯台の設備がなかった頃には、あらしがやってくるといふ前には、この地藏が怪

しい光を放される。そのさまを見た舟はたとえ漁の途中でも、急いで浜に引き返したと言う。うっかりこれを無視して漁をしていたりすると、激しい風波がおこり舟もろとも海のもくずと消えてしまう。このようなあらしを予告してくだされる尊い地藏様だとよろこばれている。

何百年もの間このことが代々語り継がれて、やがてだれいともなく『火ともし地藏』の名で漁師たちからあがめられてきた。燈台のなかった何百年の間、氷見の漁師たちはこの地藏を心の支えとし、怪しい光の感じられるときは急いで帰港するのが常とされてきた。

今でも毎年五月三日には、島の祭りとおわせてこの地藏尊の供養をし、海上安全の祈願と感謝の法要を営み参詣している。この日には漁船はそれぞれに大漁旗をおしたて、光禪寺の和尚にしたがって島にのぼり、法要に参詣するのでひととき海に花がさいたように美しい旗の波がみられる壮観さである」とある。

光禪寺は曹洞宗で海慧山の山号であり、暦応年間（一三三八〜四二）明峯素哲の開基である。明峯素哲は加賀富樫氏の出身で、建仁寺をえて加賀大乘寺の瑩山紹瑾の侍者を務め、加賀伝灯寺の恭翁運良らに参禅した。

さて、この恭翁運良は、その「行状」（『富山県史資料編II中世』二三五頁）には、五山禅僧の華嶽建胃が寛正四年（一四六三）に作成したものである。「氷見海浜有岩石屹乎波心、師於其尖上、建石浮図、蓋師之心欲来往

舟船、乃至海中鱗介之類、遊泳塔影者、共得結縁、」とある。つまり唐島に燈台のような石造物が恭翁運良の指導のもとで建立されたということである。

唐島地藏もこのような時代に造立されたのである。

恭翁運良の開いた加賀伝灯寺にも、中世の所産とおもわれる「身代り地藏」がある。このことについては別項にゆずりたい。

## 28 松太枝地藏1



松太枝地藏1

高岡市太田の松太枝神社の境内にある。松太枝神社は、明治四十二年字辰口の村社天満社と渋谷熊野社が合併して社名を松太枝神社としたものである。

松太枝地藏1は神社の境内の小堂のなかにある。ここには松太枝地藏2のほか、中世石造物の五輪塔、阿弥陀石仏の残欠がはいっている。松太枝地藏1は円光背で、顔面左半分が削り取られている。しかし、宝珠や錫杖は残っている。

ところで、太田には臨済宗国泰寺派本山国  
泰寺がある。ここは、もと法燈派総本山であ  
った。正徳二年社号帳には、神明、天神、白  
山、諏訪、火ノ宮、熊野権現、諏訪、八幡、  
諏訪、熊野権現、白山、熊野権現、薬師の十  
四社がある。

### 29 松太枝地蔵2

松太枝神社の境内の小堂の中に、松太枝地  
蔵1とともにある。これは松太枝地蔵1より  
は大振りであり、舟形光背で顔面は削られて  
はいない。宝珠、錫杖も残り、ほとんど完成  
品である。

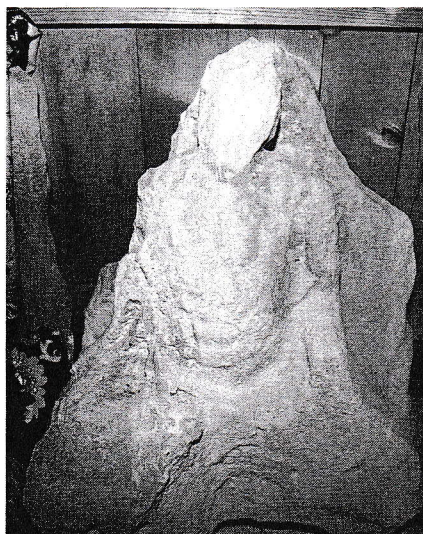


松太枝地蔵2

### 30 雨晴地蔵

この地蔵は、俗に「首切り地蔵」と呼ばれ  
ている。『太田―歴史と風土』（昭和四十八年  
刊）によると「雨晴駅の北側松林の小さい堂  
の中にある。この地蔵には、むかし、上杉謙  
信が森寺城を攻めるため、軍船を連ねてこの  
沖合にさしかかると、船が少しも動かなくな

った。謙信の武将有坂備中は、ふしぎに思い、  
きつと魔神の力にちがいないと上陸したところ、  
松と松の間にある一体の地蔵がにこにこ  
わらっていた。備中は、こいつのしわざにち  
がいないと、一刀のもとにその首を切り落と  
したところ、船はたちまち前進して、目的地  
に向かうことができたという伝説がある」と  
いう。



雨晴地蔵

JR氷見線の雨晴駅の線路を挟んで、北側  
に小堂がある。その中には、中央に中世石造  
物で大振りの阿弥陀石仏が鎮座している。こ  
の石仏は左肩から、右肘にかけて斜めに折れ  
ている。有坂備中が切ったとされる地蔵は、  
このことをいっているのであろうか。しかし  
この石仏のうしろには、多くの中世石造物に  
混じって地蔵半跏像もある。

この地蔵は、顔面が縦に半分近くも削り取  
られ、宝珠、錫杖も無い。また光背も無くそ  
の原形も薄い。「首切り地蔵」は、実はこの

地蔵半跏像のことではないかとも思われるの  
である。

### 31 円通庵地蔵



円通庵地蔵

高岡市江道の円通庵跡にある地蔵である。  
江道は、もと西砺波郡に属していた。地理的  
に氷見に近いのでここで論じる。江道は、市  
の西部に位置し、二上山丘陵にあり、高岡か  
ら羽咋に抜ける道がある。

円通庵は、『角川日本地名大辞典富山』に  
よると、「手洗野信光寺住職開基円通庵の跡  
は弘法大師行脚の時寺院を建立しみずから仏  
像梵字を彫ったと伝えている」とある。信光  
寺は曹洞宗寺院である。

この地蔵は、高さ七十三センチの大振り  
であり、宝珠、錫杖の頭部が欠落している。し  
かし堂々たる風貌がある。この周辺には五輪  
塔や宝篋印塔の残欠が散在している。正徳二  
年社号帳には、八幡の社名がある。

### 32 守山地蔵

小矢部川左岸の、二上山丘陵の麓に守山が

高岡市伏木国分の越中国分寺跡に立つ薬師堂の回りに、石仏が安置されてあるが、その中に混じってこの地蔵がある。



国分寺地蔵

33 国分寺地蔵



守山地蔵

ある。高岡市守山良寿庵の前のコンクリート小堂にこの地蔵がある。九体の石仏の中央にある。宝珠、錫杖も無く、首はまさに抉り取ったようである。今は、その首は新しく作り変えられている。全体が溶けたように風化している。良寿庵は曹洞宗で、瑞龍寺の末寺であるが、現在は無住である。

新湊市寺塚原の寺塚原神社の奥殿にある。平成五年十月十四日の祭日に、地元の人達のご協力で拝見することができた。この地蔵に關しては、『しんみなどの石仏』（平成三年発行）の京田良志先生の「地蔵と石仏」により予備知識があった。実見すると、右足が欠けているが保存状態はすこぶる良い。宝珠が欠落しているが、顔面は当時そのままである。また錫杖の頭部には、塔が刻んであり、細工そのものも素晴らしい出来である。元来はこのような状態であったのであろうか。ところで、ここの奥殿には中世石造物の如



寺塚原神社地蔵

34 寺塚原神社地蔵

ほかの石仏は舟形光背であり、この地蔵は円光背である。そのほか、彫法などにもあきらかに違いが見られる。この地蔵の石質は、この地方で採掘された砂岩で、俗に岩崎石といわれる石材である。地蔵そのものは削られたり、欠落した箇所はないが、風化はすすんでいる。

射水郡大島町本開発の住吉社のご神体として奥殿に鎮座している。顔面は若干削り取られ、宝珠、錫杖も欠落しているが保存状態は良い。明治九年以前は、五百メートル南の宮田にあったという。正徳二年の社号帳によると十社明神、七面大明神がある。新開発には観音



住吉社地蔵

35 住吉社地蔵

来形石仏が多く寄せ集められている。寺塚原には、正徳二年の社号帳によると山王、薬師、諏訪があるが、この地蔵は山王と関わりがあるのであろうか。寺塚原の地名の由来は、『角川日本地名大辞典富山県』によると、「地名はもとあった古寺に由来している。寛政四年の書上によれば、西に称念寺・大法寺古屋敷があり、中央に金屋迎西寺（牧野村）跡があると記している（高樹会文書）。」この地蔵も、これらに關係があるのであろうか。

## 氷見地方の地蔵半跏像石仏

No.	名称	所在地	高・幅	石質	光背の状態	像容の状態	神社との関わりと伝承
1	延暦寺地蔵	氷見市堀田延暦寺	50・26	シルト岩質の泥岩	舟形光背	宝珠が欠落している	三拾八社権現、白山、神明神明、八王子、八幡、諏訪稲荷、火ノ宮、住吉、神明白山
2	土倉地蔵	氷見市どん坂	51・30	シルト岩質の泥岩	舟形光背	首で切れている。 顎が欠落している。	八幡
3	諏訪社神社	氷見市久目諏訪社	40・16	シルト岩質の泥岩	舟形光背	縦半分が欠落している	八幡宮、白山、諏訪大明神
4	下久津呂地蔵	氷見市下久津呂八幡社	35・14	シルト岩質の泥岩	オベリスク状石塔	宝珠が欠落している	八幡、諏訪大明神、滝権現
5	栗原地蔵	氷見市栗原	60・40	安山岩	円光背	錫杖宝珠が欠落している	白山大権現、住吉大明神、貴布禰大明神、天神、火宮
6	上田神社地蔵	氷見市上田神社	20・21	シルト岩質の泥岩	不明	頭部宝珠が欠落している	愛宕、熊野、諏訪大明神、神明大神宮、住吉明神、山王大明神、天神宮
7	上田諏訪社地蔵	氷見市上田諏訪社	65・40	シルト岩質の泥岩	舟形光背	右頭部宝珠が欠落している	
8	日名田地蔵1	氷見市日名田諏訪社	40・30	シルト岩質の泥岩	舟形光背	右頭部が欠落している	白山
9	日名田地蔵2	氷見市日名田諏訪社	35・18	シルト岩質の泥岩	不明	首で切れている	
10	西念寺地蔵	氷見市南大町西念寺	43・28	シルト岩質の泥岩	舟形光背	宝珠が欠落している	
11	上日寺地蔵	氷見市幸町上日寺	53・30	シルト岩質の泥岩	舟形光背	左肩から欠落している	
12	千手寺地蔵	氷見市朝日町千手寺	44・29	シルト岩質の泥岩	舟形光背	宝珠が欠落している	観音堂、薬師、弁財天、山王、神明、祇園、神明、観音堂、天神
13	加納地蔵	氷見市加納	65・35	安山岩	舟形光背	宝珠が欠落しているが 保存状態は良い	八幡、観音薬師、剣宮、白山、白山、稲荷、諏訪、観音、諏訪
14	上稲積地蔵1	氷見市上稲積バス停	45・42	シルト岩質の泥岩	円光背	首で切れている	菅丞相天神、白山、白山、神明
15	上稲積地蔵2	氷見市上稲積バス停	55・32	シルト岩質の泥岩	舟形光背	保存状態は良い	
16	余川高柳地蔵	氷見市余川高柳	44・30	シルト岩質の泥岩	不明	頭部宝珠錫杖が欠落している	金田大明神、五社大明神
17	余川古戸地蔵	氷見市余川古戸興聖寺西	45・26	シルト岩質の泥岩	舟形光背	顔面が削られている	
18	興聖寺地蔵	氷見市余川興聖寺	57・30	安山岩	円光背	上頭部宝珠錫杖が欠落している	
19	余川杉谷地蔵1	氷見市余川杉谷	57・30	シルト岩質の泥岩	円光背	保存状態は良い	
20	余川杉谷地蔵2	氷見市余川杉谷	30・21	シルト岩質の泥岩	舟形光背	錫杖宝珠が欠落している	
21	味川地蔵	氷見市味川	57・40	シルト岩質の泥岩	円光背	やや保存状態は良い	火宮
22	胡桃地蔵	氷見市胡桃火神社	55・38	シルト岩質の泥岩	不明	首で折れている。錫杖 宝珠が欠落している	火宮
23	村木地蔵	氷見市村木	55・40	シルト岩質の泥岩	円光背	宝珠が欠落している。 保存状態は良い	火宮
24	長坂地蔵	氷見市長坂別所	49・30	シルト岩質の泥岩	舟形光背	宝珠が欠落している	五社大明神、未連大明神、火宮
25	姿地蔵	氷見市姿白山神社	34・28	シルト岩質の泥岩	不明	頭部宝珠錫杖が欠落している	白山宮、九殿大明神
26	平地蔵	氷見市平高坂剣神社	40・27	シルト岩質の泥岩	円光背	顔面が削られている 宝珠錫杖が欠落している	剣大明神
27	唐島地蔵	氷見市唐島		シルト岩質の泥岩	舟形光背	宝珠が欠落している	
28	松田枝地蔵1	高岡市太田松田枝神社	52・27	シルト岩質の泥岩	円光背	顔面右半分欠落している	神明、天神、白山、諏訪、火ノ宮、熊野権現、諏訪、八幡、諏訪、熊野権現、白山、火ノ宮、熊野権現、薬師
29	松田枝地蔵2	高岡市太田松田枝神社	62・37	シルト岩質の泥岩	舟形光背	保存状態は良い	
30	雨晴地蔵	高岡市太田雨晴	50・40	シルト岩質の泥岩	舟形光背	顔面が削り取られている 錫杖宝珠が欠落している	
31	円通庵地蔵	高岡市江道通庵跡	73・35	シルト岩質の泥岩	円光背	錫杖宝珠が欠落している	八幡
32	守山地蔵	高岡市守山良寿庵	55・35	シルト岩質の泥岩	不明	首が抉り取られている 錫杖宝珠が欠落している	神明
33	国分寺地蔵	高岡市伏木国分寺跡	60・37	砂岩(岩崎石)	円光背	宝珠が欠落している	一ノ宮気多大明神、薬師

※ 表中「高・幅」の、単位はセンチメートルである。

※ 表中「神社との関わりと伝承」の神社名は、「正徳貳年射水郡堂宮社人山伏持分并百姓持分相守り申品書上ヶ申帳」(文中では、「正徳二年社号張」と略している。)による神社名である。

がある。

おわりに

氷見地方に、中世石造物の地蔵半跏像がこれほどにも多いとは思わなかった。もつと丁寧にみるとまだまだあるかもしれない。また、神社の奥殿でまだじつと眠っている地蔵半跏像がいるかもしれない。

三十五体の地蔵について、いろいろと報告したが、これらをトータルに眺めると、また、いろいろなことがわかってきた。

- 1 神社とくに、正徳二年社号帳によると白山社に多いということ。
  - 2 寺院の場合、曹洞宗などの禅宗におおいということ。
  - 3 顔面が削り取られている場合が多いということ。
  - 4 また、宝珠、錫杖が欠落している場合がおおいということ。
  - 5 顔面が削られていることや、錫杖、宝珠の欠落は人為的である。
- そのほか、もつと多くのことを知り得たが推論の域をでないで、能登半島一帯や加賀地方の調査を終えてから報告することにする。
- (尚、右記のようなシルト岩質泥岩の地蔵半跏像の石仏は、県内では私の知る限りでは立山芦峯寺閻魔堂前に二体、立山室堂に一体、立山夢殿に二体、大山町下番に一体、それに岐阜県金岡町西茂住に一体である。また、表題を「氷見地方周辺の地蔵半跏像」としたが、

右足を岩座に寄せ、左足を踏み下げた造容で、半跏像といえないかもしれないが、便宜上そ

のようにした。)

(砺波市太田一七七〇)

春秋逸聞

氷見の縫針

縫針は氷見古来の名産で、東北諸国に販売して好評であった。その起源については明確ではないが、約四百数十年前、氷見の人某が長崎へ行つてその製法を伝習して来たという。しかし確かな記録もなく伝説に過ぎない。江戸時代三百年間、氷見の針は手工業で盛に製造されたようだが、産額などは明らかではない。

氷見の縫針製造は、明治時代に入ってさらに盛んとなり、その販路も全国各地に広まって行った。日清戦争の頃は、縫針製造に従事した家は八十戸あり、製造方法は手工業で、一切の工程を一人ですることも出来るが、大部分は二人ないし数人で手分けてやった。問屋は十五、六軒あって、問屋自身が工場をもち十人から四、五十人の職工を使って製造し、又、普通の町家はその下請製造を行った。

氷見の縫針工業は、戦争とともに盛んになり、戦争終了とともに衰微して来た。日清戦争が終ると下火になり、廃業するものが多く、日露戦争が始まると針の値段が急騰し、製針業は活

気をとりもどし、製造工程に機械が導入されて来た。

氷見ではじめて機械製針が企てられたのは明治三十七年六月である。『氷見郡志』によれば亀谷九左衛門という製針業者が京都から機械を持ち帰り、光針株式会社を設立。月産五百万本を製造したと記録され、欧州大戦時には二百四十人の工員を使用したと伝えられる。

第一次世界大戦で縫針工業が好景気に湧いた当時、世界市場は日本、アメリカの支配下にあった。氷見の業者へも注文が殺到した。そこで外国向けのメリケン針が製造され、新会社がつぎつぎと生れた。

大正七年第一次世界大戦の終結とともに針の受注が激減し、会社の倒産、工場閉鎖が続出。大正十一年には一社だけになってしまった。

昭和時代に入り、日華事変等で生産はのびたが、昭和十七年国策による企業合同により、三社が一社となった。現在は二社で製造しているが年々需要が減少、全国でも縫針を製造しているのは氷見市と広島市のみであろう。氷見市柳田、昭和精密工業株式会社 取締役社長 伏脇松太郎 自刊より(一部分要略したところがあ

る。)(田中)

935-□□

## 上野 務 宛

氷見市窪一三五九

## 編集後記

▼戦後五十年目という節目の年に当る平成七年。阪神大震災、オウム真理教事件等々何かと話題の多い年のようにです。本号の内容もまた会員の話題に上るような論考が目じろ押しです。

▼永森氏の「齋藤家の遺物と先祖(中)」は、ち密な考究で齋藤家に伝わる遺物を掘り起す力作で、何時もながら氏の熱誠を感じます。網田氏はまたまた史料不足の氷見の中世史へ一矢を打ち込まれました。誰もが「朝日の首塚」の所在を探りたいと思うのでは――。

▼橋本氏はいつに変わらぬ健筆で、その「十二町潟干拓史」は干拓と仏生寺川の治水、それに連なる総合灌排に至る水を治めた人々の斗いを鮮明に記述して余す所がありません。水野間氏の「――余川小学校」は、生まれ在所の学校に愛惜措く能わずといった思いの沿革史。「仏生寺の津々良隧道」は、雨池氏ならではの津々良隧道哀話。出征兵士とそを送る人々の哀感を画いて妙、秀作である。

▼奥村氏の「西条の畑地かんがい事業」は、永く農林行政に携わり、農林業の振興に献身された氏ならではの論考。確かな資料を見る目と体験に裏づけされた農業水利史でもある。

▼高西氏は、平成四年春季号以来連載の「上庄谷相撲史」を好評裡に完結された。今号は「氷見ヶ浜関」にスポットをあてて紹介されています。室田氏の「辟田川考」は氷見人には中々着想できない論考であり、実際に現地へ足を運び、生々しい見聞をもとに追求した力作。尾田氏の「――地蔵半跏石仏」は、此れまた足でかせいだ力作。数多くの石仏を克明に記録され、白山信仰、石仏の損傷にも目が向けられていて、その論考が待たれます。

▼「史談・巷談」として小篇を集めました。湊氏

の「――晒し首を見た話」は子供の頃の思い出に合わせて、史実の一端を淡々とした調子で語って好篇。村田氏の「大同合併した頃」は市制発足間もない頃の秘められたエピソードを綴ってはほえましく、宝住氏の「棚懸村西光寺の謎」は、歴史解明の面白さを如実に示して、共に短篇ながら読みごたえがあります。

▼次号からも、この「史談・巷談」へ気ばらない小篇をお寄せ下さい。又、「史料点描」欄を設けてみました。興味ある資料をご提示下さい。できれば解説もあれば嬉しいのですが――。何にせ、「氷見春秋」をみんなの会誌、開かれた雑誌にしていきたいものと思っています。ご支援を願う次第です。(上野)

▼第二十号(平成元年十一月発行)から故能坂氏のとを受けて編集を担当し、第三十一号で一応役割を終わることとなった。その間長かったようで、また経ってみれば短かったようでもある。多くの読者と各位の寄稿によって支えられて、今となってみれば苦より楽しい思い出が多く残る。

▼苦勞したのは埋草である。短文で本誌にふさわしい資料を十編程度も探すことは大変であった。会員からも二、三枚の「逸聞」を寄せられると編集子は助かると思う。(田中)

平成七年十一月六日 印刷  
平成七年十一月十日 発行

第三十二号(税込) 頒価六〇〇円

編集発行人 橋本芳雄

発行所 氷見春秋会

〒935-02 富山県氷見市中村一三三七

TEL 0766(72)2395

振替口座〇〇七一〇三二一六九三五

印刷所 小間印刷株式会社

高岡市利屋町3番地

TEL 0766(2)0411